

タイトル:イチゴ‘さちのか’の小型ポット育苗における花芽分化率向上のための低温暗黒処理法

[要約]

イチゴ‘さちのか’の小型ポット育苗における、低温暗黒処理での花芽分化率向上には、処理温度を17～19℃程度とし、8月30日から22日程度の処理とすることで、約80%の株が花芽分化し、開花株1株当たり120g程度の年内収量が得られる。

愛媛県農業試験場 栽培開発室

[連絡先] 089-9973-2020

[部会名] 野菜・花き・茶

[専門] 栽培

[対象] 果菜類

[分類] 普及

[背景・ねらい]

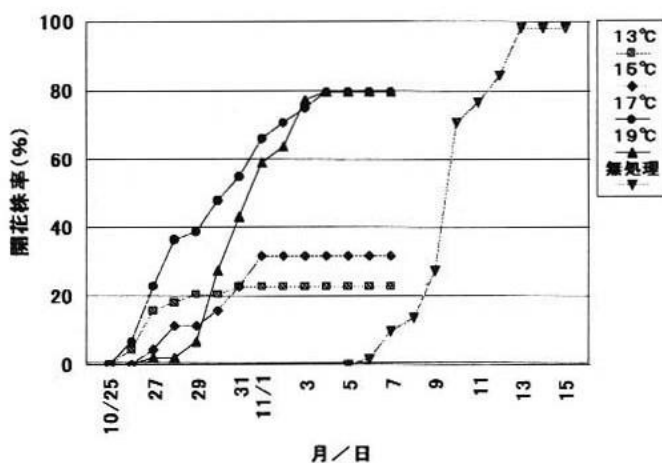
イチゴ‘さちのか’は、食味が良く果実が硬く日持ち性に優れるなどの長所があり、本県でも徐々に普及している。しかし‘さちのか’は、従来の品種に比べて開花が遅い上、早出しのために低温暗黒処理を行っても花芽分化率が低いという問題がある。そこで、‘さちのか’の小型ポット育苗における、低温暗黒処理での花芽分化率向上方法について検討した。

[成果の内容・特徴]

1. ‘さちのか’は、低温暗黒処理温度が13～15℃では花芽分化率が低く、17～19℃のやや高い温度域で花芽分化率が大きく向上する特性がある (図1)。
2. ‘さちのか’は、17～19℃で8月30日から22日程度低温暗黒処理することにより、約80%の株が花芽分化し、無処理苗に比べ8日程度開花が促進される (図1)。
3. 低温暗黒処理の開始時期を20日程度早めた場合 (8月11日処理開始)、花芽分化率は17℃で最も優れるが、この場合、花芽分化率が30%程度に低下するため、実用的な処理開始時期は8月30日頃である (図1、図2)。
4. 低温暗黒処理中の温度管理は変温管理にする必要はなく、17℃程度の一定でよい (図2)。
5. 17～19℃で低温暗黒処理し、花芽分化した株の生産力は、13～15℃で処理したものと比べて収量や品質面で同等以上であり、株当たり120g程度の年内収量が得られる (表1)。

[成果の活用面・留意点]

1. 育苗時の鉢受け時期や施肥管理を徹底し、充実した苗を用いる。
2. 17～19℃で低温暗黒処理する場合、処理前の遮光は入庫中に葉焼けや根の褐変等の苗傷みを生じることがある。



耕種概要

育苗：6月26日アイポットに鉢受

施肥はIB化成S1号を2週間おきに

3粒ずつ置肥し、8月16日よりN中断

低温暗黒処理：8月30日～9月21日

本圃定植：9月21日

栽植密度：畝幅110cm 株間23cm 2条植

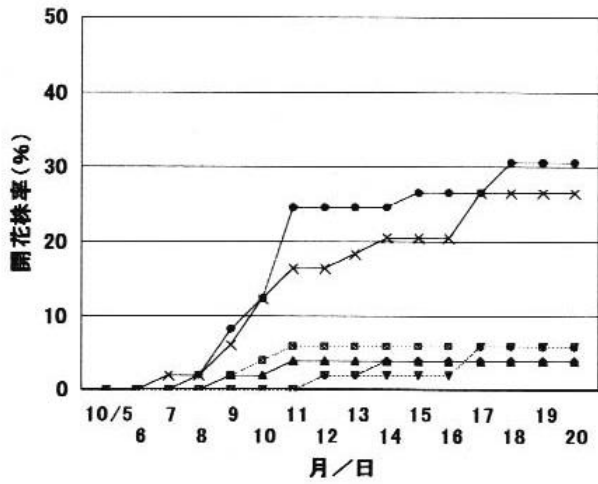
(7,905株/10a)

本圃施肥量：N, P₂O₅, K₂O =18.6, 19.8, 16.2

(Kg/10a)

* 無処理苗は9月26日定植

図1 低温暗黒処理温度と開花株率 (さちのか：8月30日処理開始)



耕種概要

育苗：6月5日ツインポットに鉢受
 施肥はIB化成S1号を2週間おきに3粒ずつ置肥し、7月28日よりN中断
 低温暗黒処理：8月11日～9月7日
 本圃定植：9月7日
 栽植密度：同上
 本圃施肥量：同上
 * 変温管理は、最初10日間→以後17日間

図2 低温暗黒処理温度と開花株率（さちのか：8月11日処理開始）

表1 収量および果実品質

（さちのか：8月30日処理開始）

試験区	開花株率 (%)	頂花房花数	開花株1株当たりの収量 ¹⁾				10a 当り 年内収量 ²⁾ (kg)	15g以上の 秀品率 (%)	Brix (%)
			12月 (g)						
			上旬	中旬	下旬	合計			
13°C	23	11.5	21	45	34	100	181.8	70.0	9.2
15°C	32	13.4	20	52	43	115	290.9	66.5	9.4
17°C	80	14.3	28	60	40	128	809.5	70.3	9.5
19°C	80	12.4	20	53	39	112	708.3	81.5	9.7
(参考) 無処理促成	100	—	—	9	48	57	450.6	—	—

1) 収量調査株の平均開花日10/28～30（無処理促成を除く）

2) 10a 当り栽植本数×開花株率×開花株1株当たり収量

[その他]

研究課題名：イチゴ新品種作柄安定化技術開発試験

予算区分：県単

研究期間：平成12年度（平成9年～12年）

研究担当者：角田和利、福田康彦、大林弘道

発表論文等：なし